

【知事賞】受賞作品と選評

【短歌】

荒れ進む休耕田にて茅を刈り宵の銀河を背負いて帰る 森川 一二三

過疎と高齢化が進んでゆく地方ではあちらこちらで休耕田が増えてをり正に国土の荒廃であり危機でもある。そうした状況の中で日暮れまで働く農民の苦悩がこめられている。

【俳句】

風待ちの港煌めく帰燕かな 渡部 文子

嘗ての帆船時代には、山陰各地にも風待ち港があり、浦町も賑わったという。その港の一つに大社町の鷺浦港があり、過疎化が進んでいた中、近年空き屋を利用して活性化が図られていて、掲句の煌めく風待ち港としてぴったしか。折しも南へ帰る燕の群のきらめきと相俟って、港の明るさを強調しており、郷土の一隅に光を当てた句と思う。

【川柳】

ゆっくりと生きて行くから押さないで 福間 芳枝

人間の哀愁が漂って心に染みる句である。人生の遥か遠くの頂きまでマイペースでゆっくりと歩を進めたい。陽射しの際は道端の切り株に腰を下ろし小鳥のさえずりを聞き、風吹けば木の葉とともに思わぬ場所に吹き寄せられる、それでよい。一度っきりの私の人生決して背中を押さないで、急かさないと今の世に警告をも鳴らしている。

【詩】

「汚れ」 角森 玲子

やさしい言葉で淡々と書かれた詩ですが、深味があり、様々なことを考えさせられます。十八行の短い詩に、九回「からだをあらう」という言葉がでてきます。波のように人生の繰り返しを思わせます。繰り返しの強調が効いています。体の汚れは、洗ったら落ちるでしょう。しかし、「いいすぎたこと」「できなかったこと」「子どもをふたり 亡くしたこと」それはいくら洗っても消えない。読者はそれぞれの身に引き寄せて、自分の人生や宿業に思いを馳せます。いい詩です。

【散文】

「煙の行方」 上平 珠成

戦中に結婚した女主人公が、夫が戦場に行っている間に義父から手籠めにされ、男の子を出産する。実は、戦死したと思っていた夫は、シベリアに抑留され、戦後、歳月をへて帰還する。しかし、抑留中の無理が災いして間もなく死亡する。長男は利発な子であった。関西の有名な国立大学に進み、銀行の就職面接を受けたが、調査で不義の子であることがわかり、就職できない。その後、地方公務員に合格した。やがて妻をもらい、母を呼び寄せて一緒に生活するようになる。理不尽で、過酷な人生を経て、母は息子と一緒に幸福な余生を送ることができるようになったのだ。戦中、戦後の苦難の人生を送った女性を描いた告白小説である。

【ジュニア部門大賞】受賞作品と選評

【短歌】

耳をつく蝉鳴く声と応援歌それぞれにある最後の夏日 小川 亜貴

日盛りの放課後であろう。命を賭けて鳴くかのような蝉の声。校庭では青春の今を湧かせて大声に歌う応援歌。その中に時の過ぎ行きを感じ取る中学最終学年の感慨が揺るぎなく滲む。

【俳句】

石鹼玉色を変えつつ飛びゆけり 友塚 美羽

庭先などで青空へ吹き流す石鹼玉は、日光に映え虹の七色を漂わせるのも、又はかなく消えるのも夢のようである。中七の語には確かな目差しがあり、下五の語には夢を追う作者の心情が込められている。

【川柳】

オムライスみんなの笑顔包みこむ 山藤 木葉

ふっくらと包むオムライスにみんなの笑顔を包み込む、何と素晴らしい発想句であろうか。思わず頬が緩んでくるような幸福感がある。小学五年生の作者は、きっと家族の温かい愛情の中に育てられてきたのだろう。その優しさがこの句に表現されている。

【詩】

「雨」 坂本 宙

出来事を、普通の文章で日記のように書いた詩が多いなかで、この作品には、事実をリアルにしっかり見て表現する力と同時に、詩的な比喩や飛躍があり、詩を豊かにしています。「雨の赤ちゃんたち」「かぞくや友達や親類の雨をさそってにぎやかに降ってくる」「体の中まで雨が降ってきて」など作者独自の比喩がすてきです。最後の一行の視点の展開も鮮やかです。雨の風景が一気に浮かびあがり、詩が広がり安定します。作者の柔軟で自由な思考が光っています。